

豊小学校における総合的な学習

佐藤 雄太

1. はじめに

対馬アクションリサーチ合宿の3日目に、豊公民館にて豊小学校教員の畑島英史氏の総合的な学習への取り組みについてヒアリングを行った。畑島先生は総合的な学習を通じ、子どもに答えのない課題に対して多様な学習方法を通して、最善解を生み出す力を育てることを目標に学習を行ってきた。今回のヒアリングでは、その学習について昨年度の取り組みをもとに、プレゼンテーション形式でお話をいただいた。また、その夜には宿泊先の民泊山崎さんにて、畑島先生と実際に学習を行ってきた子どもたちへヒアリングを行った。

まず豊小学校と畑島先生について記す。豊小学校の2016年度の全校生徒数は22名で、計3クラスの完全複式学級である。学校教育目標は「希望に向かって、自ら学び考え・鍛え・社会に貢献する人間性豊かな児童の育成」(畑島英史 2017)を掲げている。豊小学校のある豊地区は対馬の中でも最北端であり、本州までの距離が160kmなのに対し、韓国までの距離は約50kmである。そのため後述するが韓国との関わりもみられる地域である。

地区の生物としては天然記念物のヒトツバタゴが有名であり、毎年5月頃に見ることができる。学校の中に入ってくるシマフトギス、天然記念物であるツシマヤマネコのフンは学校から歩いて100mのところによく落ちており、8割くらいの豊小の子どもが、実際にヤマネコを見たことがあると言っていた。1年生が育てるアサガオを食べてしまうツシマジカや、いろいろな所へフンを撒き散らすツシマテンなどが生息している非常に自然豊かな地区にある小学校である。

今回ヒアリングにご協力いただいた畑島先生は、初任校が比田勝小学校、その後佐護小学校、南陽小学校にて教員を務められた。2017年度現在、佐護小も南陽小も閉校してしまっている。畑島先生が地域学習に携わるようになった背景には、1996年の文科省答申で「生きる力」が提唱されたことが関係している。畑島先生が教員になったのが1997年であったこともあり、このような学習をするのは使命なのではないかと考え、地域学習を始められたそうだ。教員になった時から、何か地域のことを教えなければいけないという話になり、対馬で何をしようかと考えてから教員生活がスタートした。その後いろいろと取り組みながら、対馬にて総合的な学習を行った。

そこから佐世保へ行ったが、対馬は自然が豊かでいろんな学習素材があるが、佐世保の中心部にいた時には自然は少なかった。商業地域である地理的特徴と、今まで自然のことを学んで得たノウハウを生かし、佐世保では商業を学び始めた。

また、地域学習をしている先生があまりおらず、カリキュラムもそろっていなかったため、どのように授業を進めればいいのか、ほとんどの教員がわかっていなかったそうだ。畑島先生は「生きる力」の育成を目標とした「総合的な学習の時間」は、学習指導要領が改訂されてから何年も経っているのに、まだ方法論も評価の方法もしっかりと確立されてい

ないことが大きな問題であると考え、それについて学ぶため、大学院に進学されたという。そこで、カリキュラムの確立を研究の題材にし、実践研究報告書をまとめられたそうだ。

2. 総合的な学習について5つの手立て

次に学習の上での5つの手立てについて記していく。

①KJ法を活用した思考方法の充実

KJ法とは、複数の多様な情報や意見を、類似性や共通性のある物事にグループ化し、これを繰り返すことで新たなアイデアや意味を発見する技法である。地域学習を始めるにあたって地域の良さを書きだし、発表してみると一見違うことでも共通点があるということに子どもたちが気づく。その気づきをカテゴリーごとにネーミングして「歴史」、「便利」、「自然」といったように分類していく。現段階では仮説段階でのブレインストーミングであるので、ここで出た話をもとに地域の実態が本当なのかを確かめるためフィールドワークを行う。学習を行う中で地域の課題として挙げられた、祭りが少ない、若い人が少ない、ゴミが多いといった問題は、自分の地域だけでなく対馬、さらには日本全体の課題であるということに気づいていった。そして、子どもたちはこの問題を知ってもらうために地域外の人にも対馬に来て欲しいと考えるようになったそうだ。その結果子どもたちは地域外の人に対馬に来てもらうために、移住と観光という視点を導き出したのである。移住と観光の視点をKJ法によって整理し、ランキングを作った。子どもたちはKJ法に慣れ、学んだことを収束するだけでなく、そこからの新たな発見も得、移住や観光の要素を考える際や、島らしさという価値を深めたりする際にもKJ法を活用するようになったという。

②地域人材・外部人材の活用

豊小には学校評議員と呼ばれる地域コーディネーター機能を果たす方がおり、地域人材を有効的に活用している。例えば1、2年生が授業で野菜作りを行う場合には、地域コーディネーターに相談すると野菜作りに長けた人材を教えてくれる。このように学習に適した人材を紹介してくれる地域コーディネーターの存在は大きい。実際、鯨組という昔、捕鯨を行っていた人たちについて学ぶ際には、武末俊紀さんという地域の方が活躍した。武末さんは普段から学校の行事へ参加していた方で、子どもたちの中でも歴史については武末さんに聞けばよいというように認識されている。

「うみやまかわ新聞」を作成する際にも、歴史というテーマについて調べることになると、先生が子どもたちに「武末さんが鰯浦（わにうら：豊地区の隣の地区）に来て」と言っていたことを伝え、子どもたちは鰯浦へ向かう。「うみやまかわ新聞」とは、詳しくは後述しているが、日本の地域にある文化や歴史等を通じて日本の姿を知ることが目的とした、日本各地の小学校や地域が作成している新聞のことである（うみやまかわ新聞 2015）。初めての鰯浦で疑問が生まれたところで武末さんが登場し、鯨組に関しての話をする。

鯨組の墓が倒れているのを見たときには、子どもたちはどうして倒れているのかなど、鯨組の墓を見てさまざまな疑問を持つ。猪や鹿が荒らしたと武末さんが教えると、みんなでお小遣いを出し合って立て直さないかという案も出たそうだ。鯨組に関してのコーディネ

ネットはそれで終わり、そのあとの行動は子どもたちに任せる。地域コーディネーターは、あくまでもコーディネートをすることで最終的な目標や指示は出さないのである。

外部人材という点では、離島経済新聞社の人たちの支援も欠かせない存在である。実際に離島経済新聞社の方に、東京から対馬に来てもらいさまざまな指導を受けたそう。このように、沖縄や東京、仙台など色々な地域の人と関わり、共に学習をしていく中で地域比較を進めていくことができる。また、テレビ会議のような ICT の活用は、実際に足を運ばなくても地域交流の機会となるので便利であり、重要なものであるといえる。外部から対馬を見た人が子どもたちに対馬の魅力を話すことで、対馬らしさは何なのかと子どもたちが考える機会となる。その結果、子どもたちに「対馬らしい〇〇」といった視点が加わり、さらに焦点をしぼり、地域について調べていこうと考えるようになるのだという。

③情報収集と整理分析

上記の手順ののち実際に情報収集、整理分析を行う。対馬古文書研究会資料や上対馬町誌などの書物の他、インタビューなども必要に応じて行っていく。昨年度は水産業のことを調べる際に漁業者にインタビューを依頼したそう。その際、水産業だけでなく、関連している鯨組についても話を聞きたいという子どもがいたという。

上で述べたように地域コーディネーターからコーディネートされた鯨組に関して、子どもたちが自ら学ぶ姿勢を見せた。実際に、インタビューを行った際には「どんな方法で魚を捕るのか」と質問をすると、漁業者は「引き縄、述べ縄で釣ったり、立て縄や巻き縄の網でとったりする」と教えてくれた。鯨組に関心を持っていた子どもは書物に、鯨も網で捕っていたと書いてあったことに気づき、「今でも鯨はいるのか」と聞くことができたという。それに対して漁業者から、「ミンククジラはよく見かける」という話を聞き、昔はたくさん種類の鯨がいたが、現在は種類が減っていることに気付く。そこから現在だけでなく過去の水産業や鯨組、さらには鯨組のみならず対馬に関する情報が増え、分析を行っていく。そして鯨組から「対馬らしさ」を考えることができるようになったことが窺えた。

④多様な場での表現活動

ここまで述べてきた学習をまとめて終わりではなく、様々な発表の機会を設け、発表を行った。最初の発表は豊小学校で行った。この発表には、対馬市役所の方が見に来てくれ、もっといろいろな人に聞いてもらった方がいいのではないかという提案をされたという。その後全国からみた対馬の課題を視点に、研究者が全国から集まる対馬学フォーラムで発表してみないかと提案をされ、畑島先生が子どもたちに「発表してみないかと言われていくけどどうする？」と声をかけると、ぜひ発表をしたいという意欲が見られた。そこで発表に向けて「対馬らしさ」を再整理すると、対馬らしさとは「資源を大切にする」、「仲間と協力する」、「ボランティアの精神」、そして「副業」の4つがキーワードとなった。

対馬学フォーラムで発表した際には、その場にいた利尻島の子どもたちと振り返りを行い、交流をすることができた。また、対馬学フォーラム開催のチラシが全土に配られたことにより、それを見た近隣校から声をかけられ、学習交流の一環で近隣校での発表を行った。子どもたちはKJ法から整理分析を行い、多くの地域人材や外部人材と触れ合い、学習成果の発表を通じて、このような4つの「対馬らしさ」を見つけることができた。この対

馬らしさを示す「資源」、「仲間」、「ボランティア」、「副業」は、当然昔も今もそしてこれからも受け継がれていく対馬人の、資質といえるだろう。

⑤自分たちが考えた社会参画活動

豊小学校の5、6年生の大きなテーマが「地域の未来」ということもあり、新聞づくりでお世話になった人や未来のためにできることは何かを考え、子どもたちは鯨組のお墓を建てようと提案をした。しかし、漢字が難しく字が読めない、元々のお墓がどこにあったのか、どのような形であったのかもわからないので、みんなでお墓を掃除しようという案が出てきた。そこでお墓を掃除し、花を添え、手を合わせた。するとそれを知った地域の人が、ご褒美を持って学校に来てくれたという。

また、鰯浦地区で子どもたちが学んできたことを発表した際には、聞いていた地域のおじいちゃんが「自分たちが知らなかったことを子どもたちが調べるとはすごい、子どもたちがこんなに調べているのに私たちは何をやっているのだ、協力しよう」と呼びかけてくれたという。結果として地区の総会の中で鯨組のお墓に柵を立てようという話につながったそうだ。この経験から、子どもたちは自分たちがしたことが地域のためになったという自覚を持つことができただろう。

畑島先生は、鯨組のお墓を子どもたちが掃除することは全く考えていなかったという。これも、子どもたちが答えのない課題に対して自らが考えた結果であろう。この取り組みから、自由な発想で主体的に行動をすることが重要であり、校内だけでなく地域に進出し、貢献することで、自分たちだけでなく地域の方への刺激ともなったといえる。

3. 子どもたちへのインタビュー

畑島先生の話聞いた夜、宿泊した民泊山崎さんにて畑島先生と子どもたちにヒアリングを行った。以下に、3つの事柄について記す。

①CMの作成

昨年、豊小学校では学習のまとめとしてCMを作成した。私たちも実際に見せてもらったが、子どもたちが出演しており、とてもパワフルなCMであった。初めて作ったものが鯨組に関する内容のものであったという。完成したものをNBC（長崎放送局）テレビのディレクターに見せたところ、顔が出ていない点といろいろしゃべりすぎている点について指摘されたそうだ。その反省を生かし、新たに「うみやまかわ新聞」づくりを通じた韓国に対する見方や考え方の変化をまとめ、CMを作成したそうだ。

島内のいろいろな場所で撮ってきた写真を、畑島先生がパワーポイントでまとめ、作成した。先生がかかわったのはパワーポイントの構成のみで、著作権の断りやコンセプトは子どもたちが考えたという。畑島先生は昨年の授業の中で、子どもたちは質問を1回以上することができるようになったと語っていた。多くのインタビューや課外活動を通じ、質問の回数だけでなく質の高い質問を投げかけるようになったという。また、電話をかけること、お礼の挨拶は人との関係を作る際に重要であることについても学んだそうだ。

②うみやまかわ新聞

「うみやまかわ新聞」は、小学校高学年を対象とした教育プログラムであり、2014年に始まった。2015年から対馬市も参加を始め、2016年度では日本各地で14の地域が取り組んでいる。地域学習やキャリア教育などの総合学習プログラムとして、「多面的・総合的にものごとを捉える力」、「コミュニケーション力」、「他者と協力する態度」、「つながりを尊重する態度」、「情報メディアの基本知識」、などを総合的に学ぶことができる（うみやまかわ新聞 2015）。

去年の豊小学校の新聞のテーマは、「上対馬と韓国の今と昔、そして未来へ」であった。古くからの玄関口であった鰐浦の紹介や韓国とのかかわりのある観光、文化などについて詳しく書かれており、島外から対馬に来てもらえるよう魅力を伝えた記事になっている。新聞作成の際も、KJ法を利用し、かなりの時間はかかったが、最終的には自然観、歴史観というところからテーマを決め、作成したということであった。

その中で、韓国に対する住民の意識調査を行ったという。アンケートを実施するにあたって、どのように聞けば偏りなく調査を行うことができるのか、子どもたちは「無造作」、「ランダム」というキーワードを考えたそうだ。調査をするにあたり意図的に聞いてはいけないという考えができていた。すなわち子どもたちは自然に統計学をしているわけであった。新聞の作成を行うことで地域学習はもちろんのこと、上記の「多面的・総合的にものごとを捉える力」、「コミュニケーション力」、「他者と協力する態度」、「つながりを尊重する態度」、「情報メディアの基本知識」が潜在的に身についていくと考えることができる。

③ヒアリングをして興味を持った点

最後にヒアリングで聞いた、子どもたちが思っている対馬の良いところ、誇りについて記したい。

対馬、また自分たちの住んでいる地域の良いところは「豊地区、鰐浦地区には歴史に関することが多く、学校の敷地内も昔は遺跡だったということから、歴史を身近に感じることができるので好き。」という声や、「地域の方と仲が良いので学校行事に良く来てくれることが嬉しい、豊地区の方だけでなく鰐浦地区の方も来てくれる。」、「対馬にはソウルフードがたくさんあり、かすまきも美味しいし、今まで食べたことがなかったろくべえを授業で初めて食べることができた。」、「かんころ餅工場にも足を運んで製造を体験もしたし、地域学習がしやすい。」といった意見が出た。かすまきとは、こし餡をカステラ風の厚い皮で巻いた対馬を代表する和菓子のことである。ろくべえはサツマイモのでんぷんでつくった対馬独自の麺料理でプルプルした食感が楽しめる、対馬の風土が生み出した素朴でヘルシーな郷土料理。かんころもちとは昔から対馬でつくられているサツマイモを蒸して作るおやつのことである。（一般社団法人対馬物産観光協会 2018）

学校行事には多くの方が足を運んでくれるが、これは子どもたちにとっても地域の大人にとっても貴重な場面であり、人が少なくつながりが大事な地域にとって非常に良いことである。このような意見からも、子どもたちが考えた「対馬らしさ」、ここでは「資源」、「仲間」を理解し、誇りに思っていることが窺える。

4. 考察

小学校での総合的な学習を通じ、地域活動、さらには地域を超えた対馬の子どもたちの活動について多くを知ることができた。畑島先生による総合的な学習は、5つの手立てが非常にうまくかみ合っているといえるだろう。ただ考えて調べたことをまとめるのではなく、実際にさまざまな角度から働きかけ、体験することで、自信を持って地域の情報を発信することができると考えられる。

ないものねだりをするのではなく、あるものの「見える化」をし、深掘りすることで今までは気づかなかった魅力、価値に気づくことができる。この点において「対馬らしさ」が生かされていると感じた。対馬では運動会をはじめとした学校行事に、保護者でなくても参加する地域の方が多数いるそうだが、地域コミュニティの衰退が進む都心部では仮に学校行事に足を運んだとしても、言葉を交わしたり実際の競技に参加することはまずないだろう。地域の方との交流というのは非常に重要なことであると感じた。

さらに、地域に根差した学習を行う際には、コーディネーターにより学習内容に適した方を招くことで、深い学習を行うことが可能となる。私はこのことが、効率的で価値のある総合学習を行うことができる理由であると考えている。また、地域人材のみならず、外部人材も活用している点で、外部から見た対馬に対する意見をもらい、新たな視点を取り入れる機会も得ることができている。対馬に関して深く研究していくことにより、当たり前であると考えていたことにも、「対馬らしさ」があるということの発見につながっている。

また、「うみやまかわ新聞」の取り組みで関わってきたさまざまな小中学校とともに学習していくことで、地域比較ができ、より対馬という地域の理解が進んだと考えられる。

そして私が何よりもすごいと思ったことは、発表、表現する力である。3日目の夜に民泊に畑島先生の学習を受けた子どもたちにヒアリングを実施したが、こちらから質問をすれば元気に話をしてくれ、どの子ども私たちに積極的に質問を投げかけてきてくれた。自分の考えをしっかりと伝えることができる子どもたちであると感じた。これは数々のヒアリング、発表をこなしてきた子どもたちの力であると思う。子どもたちがヒアリングの際に気を付けていたことは、話者の目を見て話を聞くこと、そして質問をたくさん考えておくことであった。たくさんとはどれくらいかという、10個以上考えておくというのだ。20個近く考えておいて話の中で重複するものがあれば消していき、話が終わった後で疑問に思うことを質問するように心掛けていたという。この力も総合学習を通じてできるようになったことだと畑島先生はおっしゃっていた。

私は、自分がどんな小学生だったかは記憶にないが、豊小の子どもたちのように勉強や交流の場に積極的に参加していたかと問われれば、そうではないと思う。彼らは総合的な学習を通じ、能動的に動くことが自然と身についているといえるだろう。5つの手立てからさまざまな学習を行う中で身についた力は立派なものであり、また地域学習を通じて対馬、豊地区を誇りに思う気持ちは素晴らしいものである。このような学習を全国で展開することができれば「生きる力」を備えた人が育っていくのではないだろうか。

5. まとめ

ここまで述べてきたように子どもたちは総合的な学習を通じ、地域学習を行ってきたわけであるが、子どもの保護者の中には自分たちの時代には全く地域学習をしなかったという方がほとんどであった。子どもに聞いて初めて知ったこともあるということで、地域学習をした日には、家に帰ると必ずお母さんにその話をするという子もいた。地方創生が唱えられている現代において活発的な子どもは重要であり、私たちが会った子どもたちが将来活躍することを期待している。

また、本報告では触れなかったが、私は複式学級に驚いた。恥ずかしながら私は複式学級という制度を対馬へ行って初めて知った。これまで生きていた中でかかわりのないものであり、今回アクションリサーチに参加していなかったら一生かかわることがなかったかもしれない。夏休みということで、実際の授業風景を見ることができなかったのが残念であった。複式学級について話を聞いてみると、教員の中でも賛否両論あるということであった。実際に自分とは関係のない授業が行われている中で勉強をするのは難しいと思う。しかし、総合や道徳などは、他人との意見の共有や議論によって考えを深めることができるためメリットも十分に存在する。先生にかかる負担は大きいかもしれないが、1人だけのクラスより複式学級の方が生きる力は伸びるのではないだろうか。子どもたちの意見では、複式学級に対して他人の考えを聞くことができるため楽しい、という意見が多かった。民泊でのヒアリングに参加した保護者に話を伺ったところ、みなさん複式学級に対して最初は不安があったものの、子どもたちの勉強に対する積極性を見て、今では感心しており、不安はあまりないということであった。この日のヒアリングでは教員、保護者、子どもといった3つの視点からの複式学級に対する思いや考えを知ることができた。

私は今回初めて対馬を訪れた。実際に文献を読んで抱いていたイメージと足を運んでみるとでは全然違った。自然は豊かで居心地がよく、人は温かくて親しみやすい。その場へ行かなければわからない魅力が多くあったことを知り、その魅力を感じることができたのは非常に嬉しい。5日間のアクションリサーチをコーディネートし同行してくださった吉野氏のように、Iターンで対馬へ行く人も増えているという理由もわかった気がする。教育、観光、資源などさまざまな観点から対馬の魅力を訴え、より多くの人に知ってもらい対馬がよりよい地域になることを心から願っている。

【参考文献】

畑島英史, 2017. 8, 『「対馬らしさ」を探求する総合的な学習の時間—歴史的遺跡「鯨組」

の実践を通して—』アクションリサーチ合宿3日目配布資料.

一般社団法人対馬観光物産協会, 2018, 「おみやげ - おみやげ品」,

(2018年2月23日取得 <http://www.tsushima-net.org/gourmet/goods.php>).

一般社団法人対馬観光物産協会, 2018, 「グルメ情報 - 郷土料理紹介」,

(2018年2月23日取得 <http://www.tsushima-net.org/gourmet/food.php>).

うみやまかわ新聞, 2015, 「うみやまかわ新聞とは?」, 「参加地域のご紹介」,

(2018年2月23日取得 <http://umiyamakawashinbun.net/>).

うみやまかわ新聞，2015，「昔ながらのおやつ～かんころもち～」，

(2018年2月23日取得 <http://umiyamakawashinbun.net/post/139656672521>) .

(さとう・ゆうた 立教大学社会学部現代文化学科3年 阿部治ゼミ)